京都大学	博士（文学）	氏名	太田　匡洋
論文題目	哲学方法論からみたポストカントの一潮流 ――J. F. フリースおよびショーペンハウアーを中心に――		

（論文内容の要旨）

太田匡洋氏の論文「哲学方法論から見たポストカントの一潮流―Ｊ・F・フリースおよびショーペンハウアーを中心に―」は、J・F・フリース（1773-1843）、A・ショーペンハウアー（1788-1860）という一九世紀前半から半ばにかけて活動した二人の哲学者の哲学を方法論の観点から検討することで、（狭義の）ドイツ観念論を中心としたドイツ哲学史観にたいして、これとはまったく異なった哲学的潮流があったことを描き出そうとする論文である。この時代のドイツ哲学は、カントの批判哲学の影響の下、その徹底化と批判を通じて形成されていたと言えるが、しかし、これまでの哲学史理解において、フリースの哲学は時代に遅れた「心理主義」の哲学者として、傍流としての位置づけしか与えられてこなかった。本研究は、フリースとショーペンハウアーに着目することで、そうして歴史の表舞台から消えてしまった、一九世紀ドイツ哲学の系譜の一端を描き出そうとする試みである。

序論「なぜフリースの思想の再構成から始める必要があるのか」では、今日のフリース評価がどのように形成されてきたのかを、J・F・ヘルバルト、K・フィッシャー、J・E・エルトマン、さらに新カント派のリープマン、ヴィンデルバントにたどり、ヘーゲル学派のフリース批判が新カント派にも継承され、それによってカントを誤って理解した心理主義者というレッテルが貼られるに至ったことを示す。しかし、こうした評価は後になって形成されたものであり、同時代においてフリースは「心理主義者」としては理解されてはいなかったことが明らかにされる。

第一章「J・F・フリースの哲学」では、いよいよフリースの哲学に取り組み、これを方法論的観点から検討する。フリースは「理性批判」と「形而上学」を区別しており、この第一章の第一節では上記の「心理主義」批判に関わる「理性批判」を取り上げている。そこでとくに中心となるのは、「背進的方法」ないし「分析的方法」と呼ばれる方法である。それは、普遍的原理から経験へとアプローチする「総合的・前進的方法」とは異なり、個別具体的な「日常的な生活の諸判定」から出発し、「一般的なもの」ないし原理へと上昇していくというものである。そしてこの方法を特徴付けているのは抽象Abstraktionであることを筆者は明らかにする。ここに、筆者は、最高の原理を確定しそこから出発することで哲学体系を展開しようとした、ラインホルト以降主流をなしたアプローチとは異なった、経験から出発するもうひとつのポストカント哲学を見いだす。

とはいえ、こうした経験に定位した方法論は、後の心理主義的理解の起因となった

ものでもある。そうした心理主義的フリース理解については、すでに二〇世紀の新フリース派哲学者ネルゾンによって、ア・プリオリな「批判の対象」とア・ポステリオリな「批判の内容」を区別することによって反論がなされていた。しかし、筆者はこれを不十分として、フリースのこの方法論の意図が「必当然性」の確保にあることを主張する。悟性に対応する思弁の「論理的思考行程」が向かう対象は、理性の担う「合記憶的な思考行程」に場を持っており、ここで「必当然性」が確保されるのである。これによって、「通常の諸判定」から出発する心理学的な「自己観察」にはあくまで限定的な位置づけしか与えられておらず、心理主義との批判はフリースの哲学を一面的にしか捉えていないと筆者は結論づける。

第一章の第二節では、フリースの哲学の発展において重要な役割を果たしているとされる「真理感情」（２．１）と「物自体」（２．２）というトピックが取り上げられる。筆者は、フリース哲学の発展史のなかで「真理感情」というフリースの独自の概念に、どのような位置づけが与えられてきたのかを検証することによって、１．この概念が「演繹」とは異なるもうひとつの哲学的認識の正当性の基準として、問題含みのかたちで導入されていること、２．しかし『知識・信仰・予感』や、『形而上学体系』、『宗教哲学の手引き』といった著作において、倫理的原理が問われる中でこの「真理感情」により重要な役割が与えられることになったことを明らかにする。「物自体」概念をめぐっては、フリースはより直接的な「ドイツ観念論」批判を意図し、後者が物自体を否定しようとしたのにたいして、フリースは、カントの物自体概念を換骨奪胎し、同じ「物」の２つの側面、物の本質とその現象の仕方として積極的な意義を認めていることが明らかにされる。

第二章「ショーペンハウアー哲学の再読―哲学的方法論の観点から」においては、このフリースの哲学のショーペンハウアー哲学への影響を内容的な側面から明らかにするべく、ショーペンハウアー哲学の方法論が検討される。第一節では、「物自体」概念が取り上げられ、ショーペンハウアーがこの用語を単純にカントから受容したわけではなく、「物」と「それ自体an sich」の結合からなる語であることを重視していること、それが初期の議論においては、「表象」ではない、「自体」としての実在性を「内在的立場」から論じようとしたものであることが示される。こうして、初期には表象外の「自体」を排除しようとする立場が取られていたが、中期の形而上学においては物自体が哲学の扱うべき対象として取り上げられるようになっていったこと、そしてその際の方法が「抽象」として定式化されるに至ったことが明らかにされる。とくに、意志と結びついた「客体性Objektität」という概念の導入に際して、この抽象が「（表象の）可能性の制約」を明らかにする学としての形而上学の方法として積極的な役割を果たしていることを論じ、そこから「物自体としての意志」というショーペンハウアー独自の概念が、「外的世界の実在性」という問題へ答えようとするなかで形成されたものであることが主張される。

第二節では、ショーペンハウアーの倫理思想がとくに「共苦」の概念に着目して検討される。筆者はまず『意志と表象としての世界』で言及されている「泣く」という現象についてとりあげる。このショーペンハウアーにおける「泣く」の分析に関して筆者は、「共苦」が一方で直観的な表象との関わりにおいて成立するものとされながら、他方で他者の苦悩が現実化する以前にも成立しているような具体例を挙げているという矛盾を指摘し、この矛盾を解決すべく、そこに「想像力」の積極的な役割を見いだす。つまり、「想像力」が後者の「共苦」を可能としているのであり、これによってショーペンハウアーがたんに行為の決定論を主張しているだけではなく、「良心の陶冶」を可能とする倫理学を提示していることが主張される。

第三章「ショーペンハウアーとフリース ―影響史の観点から」においては、フリースとショーペンハウアーの影響関係を資料的に明らかにするとともに、フリース以降のフリース学派と呼ばれる哲学者たちの系譜が描かれる。第一節では、まずショーペンハウアーの帰納概念の発展史の検討を通じて、ショーペンハウアーがフリースの『新理性批判』を実際に読みながら、この概念を練り上げていったことが、資料的に明らかにされる。さらに、内容的にもショーペンハウアーが経験主義的性格を強調しながら、経験の「全体」を扱うことを形而上学の課題とし、そこで方法として「抽象」を重視している点にフリースとの類似性があることが指摘される。第二節では、エルンスト・フリードリヒ・アーペルトを中心とする一九世紀半ばの「フリース学派」の成立と、二〇世紀初頭におけるレオナルト・ネルゾンによる「新フリース学派」の形成の歴史的経緯が描かれるとともに、それぞれのフリース受容の特徴が論じられる。アーペルトはフリースの哲学を「帰納」的方法と結びつけ、哲学と自然科学の接続を目指したのであり、こうした議論が後のポパーの科学哲学にも影響を与えたとされる。しかし、このアーペルトの『形而上学』における「理性の直接的な認識」に重点を置いた解釈が、心理主義的なフリース像の形成につながってしまったことも指摘される。それにたいして、ネルゾンは、そうした「心理主義」的なフリース評価に応答し、「心理学」概念の内実の違いを指摘することで、より心理学的な諸契機を積極的に取り入れた哲学を展開したことが明らかにされ、このネルゾンもまた二〇世紀の科学哲学に影響を与えたことが示唆される。

以上の論述を通じて筆者は、フリースを哲学史において傍流に位置づける原因となってきた心理主義者フリースというフリース理解が誤りであること、このフリースからショーペンハウアー、さらには一九世紀と二〇世紀のふたつのフリース学派へといたる哲学史において黙殺されてきた、ひとつの潮流が存在していたことを明らかにし、結論としてドイツ観念論を中心とした従来のドイツ哲学史観が修正されなければならないことを主張するのである。

（論文審査の結果の要旨）

一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのドイツ哲学は、カントの批判哲学の圧倒的な影響の下に、様々な哲学者たちが新たな哲学を構想し、闘わせあった時代であった。しかし、従来の哲学史観においては、〈フィヒテからシェリングを経て、ヘーゲルにおいて完成するに至るとされる「ドイツ観念論」〉という一元的な発展史観が長らく支配的であった。一九五〇年代以降、後期シェリングや後期フィヒテへの注目によって、こうした見方に修正が加えられるようになり、最近ではドイツ観念論がヘーゲルにおいて完成するという一元的な見方が修正され、受け入れられるようになっている。また、さらに一九八〇年代以降には、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルというビッグネームの影に隠れてきた当時の比較的知られていない哲学者たちのテキストが掘り起こされ、この時代の哲学を一元的な潮流としてではなく、多様な哲学者たちの哲学的な布置（コンステラチオン）として描き出そうとする研究が行われるようにもなっている。

しかし、こうした「ドイツ観念論中心史観」の見直しの中でも、Ｊ・Ｆ・フリースの哲学が注目されることはほとんどなかった。フリースについては、多くの場合ヘーゲルが『法哲学』の中で政治的な批判を加えている哲学者として知られているに過ぎず、その理論哲学の内容、ましてはその後世への影響が議論されることはほとんどなかったのである。

こうした研究状況を踏まえて、太田氏による本論文の成果ということができるのは、以下の三点である。

第一に、今述べたように、フリース研究は一九世紀ドイツ哲学史研究上の大きな欠落となっており、本論文は、そうした標準的な哲学史においては無視されてきたフリースの哲学を描き出している。日本では、速川治郎（1987）の先駆的な研究を別としては、これまで本格的にフリースが扱われることはなかったのであり、また、海外に目を向けても、やはりフリースを主題的に扱った研究はわずかである。本論文は、そうした研究の欠落を埋めるものとして哲学史研究における重要な貢献であるということができよう。とくに、フリースの哲学をポストカント哲学として理解することで、いわゆるドイツ観念論とは異なる、カント哲学の経験的な側面を強調し発展させた哲学としてフリースの哲学が特徴付けられている。ドイツ観念論がカントの超越論的演繹論、とくにその超越論的統覚の概念に着目し、この点を発展させて成立したことは知られているが、ここに、もうひとつの全く異なったカント哲学の継承・発展の系譜があることを明らかにしたということが本論文の大きな貢献である。

第二に、本論文はそれにとどまらず、フリースの哲学がそれ以降の哲学に影響を与えていることを明らかにしており、いわばこれまで着目されて来なかった哲学史の地下水脈を描き出している。そのフリースに影響を受けた哲学者のひとりが、ショーペンハウアーであり、本論文はショーペンハウアーの方法論に対するフリースの影響を

明らかにすることによって、これまでショーペンハウアー研究の中でも看過されてきた側面を明らかにしている。

第三に、上記のフリースの哲学史的影響を明らかにする中で、一九世紀半ばおよび二〇世紀初頭におけるふたつの「フリース学派」について紹介し、その哲学の一端を明らかにした点も大きな成果である。とくに、このふたつのフリース学派が、その頃の科学思想に影響を与えていることについての指摘は、科学思想史上これまで見落とされてきた点について重要な示唆を与えるものであると言える。

しかしまた、改善が望まれる点があることも指摘されねばならない。第一に、とりわけフリース哲学の方法論に着目したことの副作用として、とくにその主要部分であるはずの「形而上学」について明らかにされないままにとどまっている点である。方法論を取り上げたこと自体は、本論文のすぐれた視点であると言えるが、やはりその方法論がどのような哲学に結実したのかもまたその方法論の是非と無関係ではない。この点について触れられていたならば、本論文はフリース研究の欠落を埋めるものとしてより完成したものとなっていただろう。

第二に、フリースに発する哲学的系譜、影響関係を明らかにしようとすることに注力した結果として、それぞれの論者の主張の哲学的意義についての考察がおろそかになってしまったきらいがある。影響関係を明らかにすると同時に、その哲学としての意義をももっと積極的に論じることができていれば、本論文はより説得力を持つものとなっていただろう。

しかし以上の欠点は、本論文の価値を大きく損ねるものではなく、またその不足について筆者自身も自覚するところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０２０年２月６日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。